



TITLE:

<學界展望>宋代の都市研究をめぐる諸問題：國都開封を中心として

AUTHOR(S):

木田, 知生

CITATION:

木田, 知生. <學界展望>宋代の都市研究をめぐる諸問題：國都開封を中心として. 東洋史研究 1978, 37(2): 279-291

ISSUE DATE:

1978-09-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/153691>

RIGHT:

宋代の都市研究をめぐる諸問題

— 國都開封を中心として —

木田知生

一

中國都市に關する研究は、今世紀に入ってから極めて多面的な成果をおさめてきた。筆者は、こうした中國都市研究の中で、宋代の都市を最も重要な研究課題の一つと考える。それは、都市の性格と形態が前代までのものと大きく異なり、現今のそれに近似する段階にまで近づいたためである。そこで、この小論では、北宋の國都・開封を中心として宋代の都市をめぐる研究概況を論じたい。

さて、先ず、唐代以後、宋代までの都市研究を概括してみよう。

唐代都市に關する研究は、大率、長安城を中心とするものであったが、その先驅的な研究業績としては、那波利貞氏「支那都邑の城郭とその起源」（史林一〇一・一九二五年）、「支那首都計劃史上より考察したる唐の長安城」（桑原博士還曆記念東洋史論叢一九三〇年）、足立喜六氏『長安史蹟の研究』（一九三三年）等が知られ、その後、平岡武夫編『唐代の長安と洛陽』索引・資料・地圖

（一九五七年）及び同氏「唐の長安城のこと」（東洋史研究一一四）、佐藤武敏氏『長安』（一九七一年）等の勞作が刊行された。この他に、唐から宋にいたる都市制度研究に大きな業績を残された加藤繁氏の一連の論考がある。「宋代に於ける都市の發達に就いて」「唐宋時代の市」「唐宋の草市に就いて」「唐宋時代の草市及び其の發展」（『支那經濟史考證』上卷所收）。その後、陸續と發表された、唐宋時代の都市に關する諸研究は、大なり小なり、この加藤論文に觸發され、影響を受けたものと言っても過言ではない。主なものとしては、日野開三郎氏『唐代邸店の研究』正續篇、佐藤武敏氏「唐代の市制と行」とくに長安を中心として」（東洋史研究二五—三）、宮崎市定氏「漢代の里制と唐代の坊制」（東洋史研究二一—三）、斯波義信氏『宋代商業史研究』、曾我部靜雄氏『中國及び古代日本における鄉村形態の變遷』（一九六三年）、梅原郁氏「宋代の開封と都市制度」（鷹陵史學三・四號合併號）等々がそれである。

さて、唐代都市では相當嚴重な坊制市制が施行されていたが加藤氏の長安の市制に關する研究では「唐代に於いても、市の制度、行の制度が儼存した以上、商店は原則として市に設けべきものであったと見るべきであらう。唐末の書には、市に近い坊に商店の存した記事が幾つか見出だされるが、其れは、大體、唐末、商業の發達につれて本來の制度の弛緩した時の有様で、國初以來の事ではあるまい。」（唐宋時代の市）とされていた。しかし、この説は那波氏の推論を経たのち、佐藤・日野兩氏によって新たに補正されることになった（前掲論文）。つまり、定められた「市」域以外の坊にも早くから坊内店肆が開設されていたことが確められたのである。また、平岡氏前掲論文「唐の長安城のこと」の第四節・出勤時間に

は、官吏の居室とその出勤時間（宋程大昌撰『雍錄』卷八によると、官吏は五更五點の時刻までに大明宮の建福門に入る規則となっていた）との關係が極めて具體的に考察されている。詳細は同論文を御覽いただくとして、ともかくも、都城内における空間距離を考えれば、加藤説の不備は自ずと明らかとなつてくる筈のものだった。従來の都市研究では、こうした常識的な考慮が、往々にして輕視される傾向にあつたことは否めない。

二

視點を宋代に移そう。宮崎氏は『中國史』下卷の中で、血液を送り出す心臓に譬えて、北宋時代における國都開封の重要性を指摘された。北宋の都市制度を考究しようとするとき、汴梁開封はまさに好箇の研究對象としなければならない。この開封についても、加藤氏の業績がその後の諸研究の基礎とされ、その成果は中國人學者の論考にも援用される程の影響力を持った。

さて、加藤論文の骨子となっているのは、坊制の崩壊過程であるが、この説に對しても、現在では多少の補訂を要するようになってきている。加藤氏に據ると「唐の坊制は宋初にも行なわれ、眞宗の天禧年間にもその存在が確かめられるが、神宗の熙寧の頃には衰えて、北宋の末期には既に崩壊し終つていた。」（『宋代に於ける都市の發達に就いて』）となっているが、梅原郁氏は、近年、前掲論文「宋代の開封と都市制度」において、この加藤説に對する疑問を提示し、「唐の坊制は、少くともそのエートスは、五代のはじめにはなくなつており、宋の開封は、最初からそうした枠を持たない都市ではなかつたのではないか」とされた。この梅原氏の説は、留保材

料を含みつつも、傾聴すべき内容に富んでいる。なお、加藤氏の宋初の市制に關する史料にもやや問題がある。加藤氏は「開封に於ける市の制度は、五代を經、宋に入つて益弛廢し、坊制の破壊と同時に全く崩壊したはり」、宋初の開封には、なお「東市」「西市」が残存し、これは長安の東西市のような限られた區域であつたと考えられた。しかし、加藤氏の使用された二史料（『續資治通鑑長編』以下『長編』と略す）卷二・建隆二年四月壬寅の條。同書卷五九・景德二年四月丙戌の條）さらに筆者の檢索による史料（『長編』卷三・建隆三年秋七月乙亥。同書卷一四・開寶六年二月丙戌。卷六〇・景德二年六月己丑の各條）ともに、「東市」「西市」の字句が見えるものの、いずれも斬刑の場所としてのみ史料に現れている。宋初に市制が嚴存していたとする史料としては、いささか心許ないではない。

以上のように、加藤説にはいくつかの弱點が残されているものの、梅原氏も「加藤氏の考證に疑問を持つといつても、それを積極的に否定する史料やあるいはそれに代る明確な事實が提示できるわけではない。」（前掲論文）と告白されるように、大筋では、加藤説にはなお高い蓋然性がある。それは、以下に述べるように、加藤氏が坊制の崩壊した時期と推定する眞仁宗期が、都市景觀上の轉換點だったからである。

如右の議論、宋初の開封に、坊制市制が存在していたかという設問は、一見したところ、かなり煩瑣なものに映る。ここで問題となるのは、坊制市制の存否よりも、むしろ、坊制の實體であつた坊牆の存否、それが、宋初になお存在していたかどうかであるが、この設問は、宋朝の統治機構を考える上で、商業對策一點だけに關して

も重要な意味を持つてくる。宋初から、店肆の大部分が、市壁や坊牆から解放され、街路に自由に進出していたと解すると、當時の都市商業、ひいては都市内部の手工業の實態は、孟元老『東京夢華錄』及び張擇端『清明上河圖』等に據ってイメージする北宋末期のそれと大した差違が無いことになる。果してそうだったらうか。

五代時期の開封について見ると、後周の世宗の登臨以前には、開封はさしたる繁榮段階にまで至っていないかつたとされている。このことは、取りも直さず、都市景觀に古いスタイル「坊牆」が残っていたことを物語っている。宋初の開封は、當然、こうした都市構造を繼承したわけだ。となると、宋初と北宋末期の開封を比較すると、そこに都市景觀上において、かなりのへだたりがあったとするのが妥當となる。事實、多くの史料は、その變容が眞仁宗期頃を境として見られたことを示している。そして、その都市景觀上の變容・轉換を大きく特徴づけていたのが「侵街」という事象であったと筆者は考える。

三

「侵街」とは、坊牆を突き崩し、街路に臨んで不法に舍屋を作り出すことをいう。これは五代以前の侵街（唐の中期、大體、玄宗期頃から史料中に現れる）には完全に當て嵌まるが、梅原氏が「侵街」と坊制の崩壊が宋では唐のように深く結びついていたらどうか疑問に思う」（前掲論文）と言われるように、宋以降の侵街舍屋は、突き崩された坊牆よりもさらに前面に進出しており、坊牆との關聯は五代以前程には密接でなくなっているようである。

さて、五代後周時の開封についてみよう。顯德二年四月に、新た

に新城（外城）を築造する旨の詔が出て、翌春から本格的な工事が始まった。それに先だち、次のような下準備があった。『資治通鑑』卷二九二・顯德二年十一月の條、

先是、大梁城中、民侵街衢爲舍、通大事者蓋寡、上命悉直而廣之、廣者至三十步、又遷墓於標外、上曰、近廣京城、於存沒擾動誠多、怨謗之語、朕自當之、他日終爲人利、

舊城内では街路の侵占が著しく、大車の行き交うことさえ困難となっていた。世宗の命で街路は擴張されたが、廣いものでも三十歩（約四十六メートル）であったことは重要である。唐長安城の大街が最大幅百五十五メートルの幅員を誇っていたのと比較すれば、開封は最初から相當小ぢんまりした空間構成でスタートした。

顯德三年初頭、南唐遠征を成功裡に終えた世宗は、京城内の街路整備に着手する。『五代會要』卷二六・街巷、

周顯德三年六月詔、……近建京都、人物喧闐、閭巷隘隘、雨雪則有泥濘之患、風旱則多火燭之憂、每遇炎熱相蒸、易生疾沴、近者開廣都邑、展引街坊、雖然暫勞、終獲大利、……中路……其京城内街道闊五十步者、許兩邊人戶、各於五步内、取便種樹掘井、修蓋涼棚、其三十步已下至二十五步者、各與三步、其次有差、

新城内の街路幅を決定し、街路の兩邊に或る程度の侵占を初めから默認した。「闊さ五十步なる者」は、新城内の最大幅員と解してよいであろう。舊城内と比較して、かなり工作自由の効く空間が、國初には存在していたものと思われる。「其の三十步已下二十五歩に至る者」の方は、正しく前掲通鑑文中の舊城内の幅員三十歩と符合する。右の詔では、その五十歩と三十歩乃至二十五歩の各街路につ

き、兩邊に各々一割分の幅だけ、樹木を種え、井戸を掘り、或いは涼棚を修葺するのを默認した。唐中期以降からの侵街傾向を見越した措置だったわけだが、この自由使用を默許した街邊の内側には、まだ、相當数の坊牆が残存していたと思われる。さて、ここではまた、開封の街路の實效幅が、最大幅でも四十歩、一段下がって二十歩乃至二十歩程でしかなくなっていることに注目して置きたい。他の小街の狹隘の狀は推して知る可きである。この幅員は、宋初にも引き繼がれた。

北宋に入つて、太宗治政の初年、景陽門街（メインストリートの一つ）における侵街を嚴責した記事が見えているが、次の史料は、より重要な内容を含んでいる。『長編』卷五一・咸平五年二月戊辰、京城衢巷狹隘、詔右侍禁衛門祇候謝德權廣之、德權既受詔、則先毀貴要邸舍、羣議紛然、有詔止之、德權面請曰、今沮事者、皆權豪輩、各屋室僥資耳、非有它也、臣死不敢奉詔、上不得已、從之、德權因條上衢巷廣袤及禁鼓昏曉之制、皆復長安舊制、乃詔開封府街司、約遠近、置籍立表、令民自今無得侵占、右引用文中、印を施した箇所は『宋史』卷三〇九・謝德權傳により改め、或いは補充した部分である。先ず、眞宗初年、京城内がかなりの狹隘状態に入っていたことが知られる。一悶着あったものの、結局、謝德權が衢巷廣袤のプランと禁鼓昏曉の制を條上し、全て唐長安の舊制（すなわち坊制）に復す線で落着をみた。さらに下文に據れば、その計劃は、開封府街司によつて、或る程度まで實行をみたのである。

ところで、右の文中に見える禁鼓昏曉の制であるが、これは加藤氏が言われる如く、坊制の崩壊過程を知る重要な手掛となる。つま

り、坊内で日没と天明の坊門開閉を撃ち知らせたこの禁鼓の有無は、坊制の消長と軌を一にするものだと思われ、例として、宋敏求の『春明退朝錄』（熙寧三年十一月から七年頃までの執筆）巻上に、京師街衢、置鼓於小樓之上、以警昏曉、太宗時、命張公洎製坊名、列牌於樓上、按唐馬周始建議、置鑿鑿鼓、惟兩京有之、後北都亦有鑿鑿鼓、是則京都之制也、二紀以來、不聞街鼓之聲、金吾之職廢矣、

とあるのを引かれ、先にも述べたように、街鼓の制は仁宗の中頃過ぎまで續き、その後廢れ、熙寧中には全く行われなくなったとされた。と同時に、坊制の崩壊も相伴つて起こつたと推論された。

この眞宗咸平五年から話を十年程遡らせる。太宗の至道元年に、朱梁の汴州城遷都以來續いていた、京城内外の坊名を新たに雅名に改めている。『宋會要輯稿』（以下『會要』）方域一・東京雜錄・至道元年十一月二十五日、

詔張洎、改選京城内外坊名八十餘、分定布列、始有雅俗之制、『會要』では、以下に一百二十一の坊名を掲げ、さらに同條の續きには、

太宗以舊坊名多涉俚俗之言、至是命美名易之、唯寶積・安業・樂臺・利仁四坊、仍舊名、

とあり、坊名を雅名に改めた事情を記している。

以上、至道元年・咸平五年の記事と『春明退朝錄』の三種の史料を對照してみると、時間的にはせいぜい四五十年の間に起こったことである。私は、至道年間の記事を、宋初にまで殘存していた坊牆の整備、もしくは坊ブロックを強固なまとまりとする都市行政の再統一の方向で考え、咸平年間の記事は、その最終的な復舊作業とみ

る。だが、この努力も効果を擧げることなく終わり、仁宗の中頃には終焉期を迎えることになったのである。加藤氏は、この坊制の崩壊のち、商店が先を争うように街路に進出したとされているが、事實は、後述していくように、街路に進出した店肆が、坊牆を切り崩し、坊制を空洞化させていったと見るのが正しい。

坊制の崩壊過程の究明には、さらに慎重な手續がなお必要であるが、ここで、視點を侵街に集中させてみよう。

咸平五年から十年経った大中祥符五年には、『長編』卷七九に次の記事が現れている。

(十二月) 甲戌、詔、前詔開封府、毀撤京城民舍之侵街者、方屬嚴冬、宜俟春月、

前詔云云とあるのは、十年も以前のことになる咸平五年のそれを指すわけでないだろう。恐らく、同年中に、咸平五年の時と同様に、街路を侵占する舍屋を撤去することが必要となり、撤去工事を実行せんとしたところ、折しも冬が近づいたので、撤去は翌春にまで持ち越されることになったに違いない。

それから十三年を経た天聖二年にも、侵街舍屋撤去令が出ている。^④『長編』卷一〇二・天聖二年六月己未、

京城民舍侵占街衢者、令開封府勝示、限一歲、依元立表木毀拆、

撤去方法は、先ず表木を立てて撤去範圍を示したのち、その範圍外の侵街舍屋を毀撤するもので、咸平五年時とはほぼ同じである。こうした侵街の勢いは、容易に押し止めることができなかった模様である。『長編』卷一一五・景祐元年十一月甲辰、

詔、京舊城内侵街民舍在表柱外者、皆毀撤之、遷入内押班岑守

素、與開封府一員專其事、權知開封府王博文請之也、

この詔によって、舊城内の然る可き位置に表柱を立て、その範圍外の侵街舍屋が、實際に撤去されたことは間違いない。『宋史』卷二九一・王博文傳に、

(王博文) 以龍圖閣學士復知開封府、都城豪右邸舍侵通衢、博文製表木按籍、命左右判官、分撤之、月餘畢、

とあり、現實に、一個月餘の工事期間を経て撤去を終えたことが記載されている。事後處理に關聯して、その四個月後、如左の詔が出ている。『長編』卷一一六・景祐二年三月丁酉、

又詔開封府、自今舊城内民舍、復有侵官街、令左右軍巡・街司覺察、仍許人告之、

これは、前年までの侵街舍屋が一應撤去されてしまったという背景がなければ考えられぬ内容である。

以上、『長編』卷五一・眞宗咸平五年(西曆一〇〇二年)、同書卷七九・大中祥符五年(一〇二二年)、同書卷一〇二・仁宗天聖二年(一〇二四年)、同書卷一一五・景祐元年(一〇三四年)、及び同書卷一一六・景祐二年(一〇三五年)の各條に據って、宋初の開封の侵街狀況を探ってきたが、眞仁宗期の右の侵街諸例は、一寸異常な程の集中度で眼中に飛び込んで来る。

では、こうした侵街舍屋撤去策は、どの程度まで斷行されたのか。もう一度、先の史料に立ち戻って考えてみよう。例えば、『長編』卷五一の史料では、「……約遠近、置籍立表、令民自今無後侵占、」とあり、同書卷一〇二では、「……令開封府勝示、限一歲、依元立表木毀拆、」とし、卷一一五では、「詔京舊城内侵街民舍在表柱外者、皆毀撤之、」とあり、同内容を傳えた『宋史』卷二九一では、

「……(王)博文製表木按籍、命左右判官、分撤之」となっている。いずれの史料も、侵街舎屋の全てを撤去せしめたとは記していない。各々の史料は、遠近を約し、表柱木を立て、そのライン外に在る侵街舎屋だけを撤去せしめた、という内容である。つまり、定められたライン内の舎屋は、撤去対象からはずされていたのである。先に引いた後周顯德三年の詔でも、街路の兩邊に、樹木を種える等の事を容認していた。その位置に、店肆・邸店とか酒樓の建造を默認するに至るのは、もはや必然の推移であろう。事實、仁宗の初年に、街衢に臨んで、店肆が相當數開設されているのが知られる。一例を示して置こう。『會要』輿服・臣庶服・仁宗景祐三年八月三日の條に、

詔曰、天下士庶之家、凡屋宇非邸店樓閣臨街市之處、毋得爲四鋪作・闢闢八、非品官、毋得起門屋、非宮室寺觀、毋得綵繪棟宇及間朱黑漆梁柱窗牖・雕鏤柱礎云云、

とあり、士庶の舎屋築造上において守る可き規則を並べているが、一般の屋宇では、邸店と樓閣の街市に臨む處でなければ、四鋪作と闢闸八とを造ってはならないと規定している。これから、街市に臨んで、かなり多くの邸店・樓閣が進出していた事實が理解できよう。

要するに、前期の度重なる侵街舎屋撤去令には、形骸化した坊牆の外側に進出した舎屋店肆を、強制手段を用いてまでも或る程度押し止めようという意圖が籠められていた。それを放置しておけば、舎屋が無制限に路心に向かい、大街が大街でなくなってしまう勢いが見られたのである。この時代は、都市景觀上の一轉換期だったわけだ。

四

唐から宋にかけて、それ以前の州縣城を中心とする舊都市以外に、地方農村の内部や、交通路沿線に、鎮市と呼ばれる新しい中小都市が勃興したことは、多くの先學によって明らかとなってきた。

これらの地方小都市の發達は、農村地域での廣範な定期市の展開を背景に持っていた。そして、都市に軽く、鄉村には重く役法上の較差の擴がったことも事實である。この較差に原因する、鄉村から都市への人口流入も少なくなかった。そのほかに、鄉村に田土を残したまま都市に徙居し、高利貸資本等との兩面經營をはかるものもあり、官僚士大夫もその大部分が都市内に居を求める風潮にあった。

一體、都市人口がどのように構成されていたのか。國都開封については、全漢昇氏に簡單な概観があるが(前掲論文「北宋汴梁的輸入貿易」(一))、その分析はまだ十分でなく、現に住民がいかなる住居に居住していたかについては、ほとんど顧慮されていなかったと言つてよい。そして、それは何も開封に限ったことではない。

開封は最大に考えて、百五十萬程の人口を抱えていた。日々の消費材、蔬菜・燃料、及び木材・穀類等々も相當な遠方から運輸されており、これについては確實な史料が揃っている。だが、これらの諸物資が都市の内部に入ってから、どのような経過を経て消費者の手元まで達したか、そのシステムと實態はまだ明確にされていない。物產流通の研究のうちで、その末端部分の究明が十分でないのである。それには、宋代以降、邸店等の大型商人團がどのような場所でのように活動していたかを探ることが有益であろう。先に引用した『長編』卷五一の史料では、侵街舎屋の中心が顯要の經營に

係る邸舎であったことを語っている。宋初には、強い規制を受けていた官僚の邸店経営も、次第になし崩しとなり、官吏の商行為の禁止も明文化されていたわけではなかった。英宗時代には王子融の邸店記事が見える。『宋史』卷三一〇、

英宗即位、……中略……（王子融）性儉嗇、街道卒除道、侵子融邸店尺寸地、至自詣開封府訴之、

邸店の街路への進出、さらに、自ら開封府に告訴に出向いた厚顔ぶりは、官僚の邸店経営がかなり一般化している風潮を考えさせる。従来、官吏の私販について論及されることがなかったわけではないが、都市に徙居した士大夫の動向分析とともに、今後さらに究明されるべき点を残している。これには、官吏の俸給の問題や士大夫の賤商觀の變遷等々、様々な背景がある。さらに、唐宋から宋初にかけて、江南の開発をベースとし、それら先進地域の經濟情勢を踏まえて中央政界に集まってきた、いわゆる財務官僚群に對しては、都市經濟政策の擔當者としての側面が、廣い視野から考察されねばならないだろう。

さて、北宋中後半期の街路に眼を戻そう。仁宗の最晩年、嘉祐四年に漢水沿いの地方都市・襄州で、やはり侵街が問題視されている。『長編』卷一九〇・嘉祐四年十二月壬戌朔、

初右諫議大夫周湛知襄州、襄人不善陶瓦、率爲竹屋、歲久侵據官道、簷廡相逼、故火數爲害、甚至、度其所侵、悉毀撤之、自是無火患、

周湛は襄州に赴任すると、早速に侵街舎屋の撤去に着手し、一旦はその工を終えたが、ここで横槍が入った。『長編』には續いて、

然豪姓不便、提點刑獄李穆奏、湛所毀撤民屋千五百餘間、老幼失業、相聚怨泣、湛素不才、又年踰七十、貪慕榮祿、不知進退、乞特責降、或令致仕、詔轉運司察實、甲子、徙湛知相州、とあり、「豪姓」の意を受けた提點李穆の上奏によって、周湛は遂に知相州に格下げられた。しかるに中央では、右司諫吳及によって眞相が暴露され、周湛に荷擔する意見表明があった。

右司諫吳及疏曰、湛所爲應科、不宜被責、……中略……時故相夏竦邸店最廣、而郡從事高直溫乃竦子壻、讒之於穆、且謂湛伐木若干株者、昔之民屋侵越官道、則木在道側、及正其侵地、則正處中衢、固宜剪去、又湛種楸桐千餘本、課戶貯水、以嚴火禁、又於民舍、得衆汲舊井四、廢而復興、人賴其力、道旁之井、反在民居之下、其侵越豈不白乎、

先の「豪姓」とは夏竦に代表されるように、邸店を所有するグループであり、地方都市の侵街舎屋も、その中心は邸店等の商業施設であったことを知り得よう。

従來の侵街諸例を検すると、その撤去理由は四個條程にまとめられる。(一)都市景觀の保持、(二)治安の維持、(三)火患の防止、(四)商行爲の規制、の四個條がそれである。このうち、(一)は坊制の存在、及びその維持と密接な關聯がある。宋初以降、侵街が進み、道の兩端から出張ってきた舎屋が、遂に軒を接する程になると、次に問題視され始めたのは、現實的な火災の恐怖であった。宋代の主だった大火は『會要』瑞異二・火災、『文獻通考』卷二九八・物異考四・火災の各項に載せられており、消火防火活動については『東京夢華錄』卷三・防火、『夢粱錄』卷一〇・防隅巡警、『楓窗小牘』卷下等に詳しい。それに據ると、打ち毀しと火巷の設置が主な消火對策

となっており、街路は少なくとも二三丈程の幅員が必要とされている。^⑧これはかえって、狹隘な街路が少なくないことを物語っている。こうした街路の状況下では、當然、従前の街路行政に大きな改變が強いられることになった。

唐代では、坊内の治安行政は左右巡使が、街路のそれは左右金吾衛とその管下の左右街使が當たっていた。ところが、坊制が弛緩し始め、街路の重要度が益してくると、舊來の如く、坊を界とする行政分擔では對應し切れない問題が発生することになった。そこで登場して來るのが「廂」制である。この制度の淵源とその機能については、曾我部氏『中國及び古代日本における鄉村形態の變遷』第五章に詳しい。この廂管轄は、大街を以てその分擔區劃を定めており、その意味でも侵街舍屋によって街路が狹隘混亂化することは、極度に嫌忌された筈である。^⑨

五

街路の重要度の益した神宗時代の開封では、舍屋の街路侵占が再度表面化してくる。杜大珪『名臣碑傳琬琰集』中編卷三〇・曾肇撰王學士存墓誌銘に、

（元豐）五年、遷龍圖閣直學士知開封府、……中略……有司言、京師並河居民、盜鑿隙限以自廣、請盡責培築復故、又按民廩冒官道者、請悉撤之、至華表柱止、已有詔施行、二役謀出中人、衆莫敢議、公獨曰、此吾職也、入爲上言、即日詔罷、都下驕呼相慶云云、

當時、運河沿邊の居住民には、隄面をも勝手に自己の所有地として侵占する者がいた。ともかくも、侵街舍屋を以前の狀態に復舊する

努力がなされ、華表柱^⑩ラインにまで後退させられた。ところが、この二工事の計劃が宦官に出たものだったから、知開封府王存が異議を提し、結局、工事中止が認められた。だが、中止に至った根本原因は、單に宦官の企劃に反對することではなく、むしろ、從來の侵街舍屋の強制撤去策が、官府側にも有效策と見なされなくなった状況を反映しているのと解すべきだろう。^⑪「侵街錢」の徵收が史料中に登場し始めるのは、丁度、こうした時期からである。

この侵街錢の徵收は、新法黨の政策下でなされたわけだが、その實態はまだ不明であり、徵收地域も限られていたようだ。『長編』卷三七・哲宗元祐元年五月壬戌の條には、舊法黨系の殿中侍御史呂陶が新法黨系李琮の舊惡を論難した文が見え、「……天下州縣、遂打量街道、分壁溝渠、雖是已出租稅之地、但係侵占丈尺、並令別納租錢、若不承認、則徹屋翦簷、然後獲免、西川州郡、有一處歲入八百貫以來、推之四海、掊斂甚多、皆（李）琮細碎剝削所致云云」と言っているが、この文の末段で、「琮所建遺利、正與陝西侵街錢相類、其侵街錢已蒙放免」と見え、先の侵街錢が、實は陝西一帯に局限されており、それも既に蠲放されていることが看取される。侵街錢徵收は時期的にもこの時期限りのものであっただろうというのが筆者の考えである。先に、侵街舍屋が撤去される原因のうち、^⑫として、商行爲の規制という一點を掲げて置いた。侵街錢徵收は、眞仁宗期に集中した侵街舍屋強制撤去對策に連なり、商業コントロールという點に眼目が在ったのであり、それは、大體のところ、屋稅・地稅の徵收對象に收斂されていたり、商稅・市易法の體系中に組み込まれていたと思われる。

侵街舍屋の中心が邸店等の大型店舗であることは前述した。邸店

は、いずれもその商業立地の必然で、交通至便の地に進出せんとしていたし、同業商人組合としての行も、北宋後半期には街路に臨んで開設されている。また、神宗の熙寧五年に、王安石の主導で新法の一環として始められた市易法は、青苗法と對比して、從來、都市の中小商人保護救済の面のみが強調されがちであるが、國家による総合的な商業統制策としての一面が忘れ去られてはならない。その實施は、官府が先ず市易務を使って市場物貨の適正價格を設定し、中小商人に營運資金を貸し附けるもので、いわば朝廷側が舊來の賤商觀を放棄し、自ら營利行爲に乗り出したもので、實際、舊法黨官僚の一部からはそのような批判を受けた。中小商人をその高利貸資本の支配下に置いていた大商人からも、嚔々たる猛反對が起こったが、この事實も、都市での商品流通調整等を盛り込んだ市易法の多面的な都市商業統制政策の重要側面を浮かび上がらせる。

六

以上、宋初の開封を中心として、唐以來の坊制市制の崩壊と、街路の重要度の進展を北宋末期に至るまで追ってきた。この過程で、都市研究をめぐる様々な問題點、及び研究の可能性についても述べてきた。最後に、論及し得なかった諸點にふれ、この小論を結ぶことにしよう。

小論で述べてきたことを要約しようとなると、北宋期の都市研究とは、實に都市街路の研究であるとも極言できる要素を多分に持っている。そして、その街路發展の中核に位置していたのは、邸店等の大型店舗であったのである。店舗の位置から街路の變遷をながめると、(一)坊内店舗から臨街店舗へ(唐中期以降より宋初にかけて

の時期)。(二)臨街店舗から侵街店舗へ(宋初、眞仁宗期から北宋中後半期)。(三)侵街店舗から夾街店舗へ(北宋中後半期以降)といった變化が序々に起こっていたのである。地域表示も、舊來の坊ブロックを中心とする表示、例えば「都茶房は順成坊に在り」(『會要』食貨五二)等の表現が、北宋末には、大率、街路を中心とした表示に移行している(『東京夢華錄』等)。また、その街路名も、その名稱から、その地域の性格が判定できるものが少なくない。

問屋資本・特許商等、遠隔地間の商業を運営する商人團は、城郭内のこうした街路に據點を持ったわけだが、これは、ヨーロッパ中世において、遠隔地商人團の定住地區ヴィク(*Wick*)が、城壁の外、その近郊に形成されたのと好一対である。中國都市商業が、官府の強い商業抑制力の支配下にあり、官府と何等かの關わりを持たない限り、思うような商行為が圓滑に行えなかった、とは從來の説である。この原因を單に君主獨裁體制に在りとするのは易いが、別の多様な角度からも中國商業を考えることは、依然として今後の課題であり続けよう。

本稿は、北宋時代における大都市内部の街路變遷過程に特に焦點を絞って論じてきた。しかし、南宋の大都市に説き及ばず、また、近年來、斯波義信氏を中心として精力的に解明されつつある江南の開發とその地域の「都市化」といった重要問題にまでも論及できなかった。さらに、都市市場活動の中心として、街路とともに重要な寺廟の商業センターとしての機能、都市住民の信仰對象、演藝の發達、東京開封と西京洛陽との政治的關係等々、言い及ぶことなく終わった問題が少なくない。都市生活を支えていた農業技術の革新と「都市化」の問題を含め、都市景觀の變容の中で士大夫官僚がどの

ような役割を果たしていたか。彼等がどのような関わり方をしていたのか。これら諸點は、以後の中國史の中でも喧しい論議を呼んでいる。宋代の都市研究に残された問題はまだまだ多い。

註

- ① 中國都市の研究現狀について、斯波義信氏が巨視的に概括されている。時代は上古から現代にまで及ぶ。『宋代商業史研究』の特に第四章・宋代における都市、市場の發展。「中國都市をめぐる日本の研究——宋代を中心に——」(*Sung Newsletter* 3, 1971)。「中國都市をめぐる研究概況——法制史を中心に——」(法制史研究 二三號)。
- ② 同書三一六頁。開封が金融・貨幣經濟の中心センターとして重要なのは言うまでもないが、風俗面での影響力も大きかった(陳舜俞『都官集』卷二・敦化五)。なお、開封と江南を結びつけていた汴河の重要性については、青山定雄氏「唐宋の汴河」(『唐宋時代の交通と地誌地圖の研究』所收)、全漢昇氏「唐宋帝國與運河」(『中國經濟史研究』上冊所收)を参照。
- ③ 加藤氏の論文「宋代に於ける都市の發達に就いて」は、一九三四年になって中國語譯が現れた。陳望達氏譯「宋代都市的發達」(新中華 二一一・一二)。全漢昇氏の一連の都市研究論文「宋代都市之夜生活」(食貨 一一一、一九三四年)「宋代東京對杭州都市文明の影響」(同 二二三、一九三五年)「北宋汴梁の輸出入貿易」(歷史語言研究所集刊第八本第二分、一九三九年)にも加藤論文が十分に吸収されている。
- ④ 一例を示そう。加藤氏の引用する『續資治通鑑長編』卷九二・天禧二年六月乙巳の條に

是夕、京師民訛言、帽妖至自西京、入民家食人、相傳恐駭、聚族環坐、達旦叫噪、軍營中尤甚、上慮因緣爲姦、詔立賞格、募人告爲妖者、(中略)時自京師以南、皆重閉深處、知應天府王會、令夜開里門、敢倡言者即斬之、とあり、この文中に見える「里門」を梅原氏もやはり「坊門」と考えられている。
- ⑤ 都市の手工業については、鞠清遠氏に勞作『唐宋官私工業』(一九三四年)があるほか、まとまった研究發展がみられない。
- ⑥ 史林六一一五所載の拙稿を参照されたい。
- ⑦ 全漢昇氏前掲論文「北宋汴梁の輸出入貿易」第一章、(一)唐五代汴梁商業的發展、を参照。
- ⑧ この侵街については、草野靖氏も言及されている。「宋の屋稅・地稅について」(史學雜誌六八—四)。坊制の崩壞と關聯させ、宋代まで論及したものとして、宮崎氏前掲論文「漢代の里制と唐代の坊制」がある。なお、この論文では、加藤説への批判は特には示されていない。
- ⑨ 五代以降の開封城の大體は、拙稿及び梅原氏前掲論文を参照。
- ⑩ 唐長安城の街路幅については佐藤武敏氏前掲書『長安』三二頁。開封が、比較的狭い街路であったのは、元來、唐代に宣武節度使李勉の汴州城として出發したことも關係がある。
- ⑪ 『長編』卷二一・太平興國五年秋七月己巳。
- ⑫ 北宋末期以降になると、坊の名は、街路の名と等しくなり、坊門は街路の入口の門を意味するように變化する。
- ⑬ これより以前、天禧四年に、開封府が侵街舍屋を撤去せんとしたが、その時は見送りになった。『長編』卷九五・天禧四年

五月戊午。

⑭ この文中に「左右判官」とあるのは、左右軍巡判官のこと。

五代時の軍巡院については、室永芳三氏に「五代時代の軍巡院と馬歩院の裁判」（『東洋史研究』二四—四）があり、宋以降については、宮崎市定氏「宋元時代の法制と裁判機構」（『アジア史研究』第四卷所収）が参考になる。

⑮ 鋪作とは、屋根を支える木組構造の末端に置く斗拱のことである。『營造法式』卷四・大木作制度・總鋪作の條を参照。總じて、四鋪作を持つ建物は、一般倉庫としてはかなり大掛りなものであったと言えよう。

⑯ 『夢溪筆談』卷一九・器用に

屋上覆檼、古人謂之綺井、亦曰藻井、又謂之覆海、今令文中謂之闌八、吳人謂之罽頂、唯宮室祠觀爲之、

とあるのを見るに、要するに格天井の一種であることがわかる。『營造法式』卷八・小木作制度三・闌八藻井、を参照。

⑰ 『長編』卷二二八・仁宗康定元年九月己未の條を参照。なお、街市（街肆）は、元來、里（坊）内の肆である里肆と對比する語で、定期市商人等の露店のな肆を指していた。日野開三郎氏「唐代邸店の研究」四・州縣城邑の邸店、を参照。のちにそれらは定着する趨勢にあったと思われる。

⑱ 加藤繁氏前掲論文、及び曾我部靜雄氏「唐宋の草市」（『宋代政経史の研究』所収）、周藤吉之氏「宋代の鄉村における店・市・歩の發展」（『唐宋社會經濟史研究』所収）、梅原郁氏「宋代地方小都市の一面」（『史林』四一—六）「宋代の地方都市」（『歴史教育』一四—二二）等々。

⑲ 佐伯富氏「宋代役法上より觀たる鄭州廢置問題」（『中國史研究』第一所収）「近世支那に於ける都市と農村」（『都市問題』四）「近世中國の都市と農村」（『歴史教育』一四—二二）、宮崎市定氏「頃畝と里と丈尺」（『アジア史論考』中卷所収）、梅原郁氏「宋代の戸等制をめぐって」（『東方學報』京都四二）「宋代都市の税賦」（『東洋史研究』二八—四）等々。

⑳ 『長編』卷一一六・景祐二年正月戊申。

㉑ 竺沙雅章氏「北宋士大夫の徙居と買田——主に東坡尺牘を資料として——」（『史林』五四—二）、青山定雄氏「北宋を中心とする士大夫の起家と生活倫理」（『東洋學報』五七—一・二合併號）等々。

㉒ 劉敦楨氏著（田中淡・澤谷昭次氏譯）『中國の住宅』は一應の参考になる。また、一般市民の大部分は借屋住まいで、士大夫の多くも居第を有すること少なく、僦舍住まいを強いられていた。加藤繁氏「宋代の房錢に就いて」（『支那經濟史考證』下卷所収）。一方、屋産の所有者には屋税が課せられた。草野靖氏前掲論文、斯波義信氏「宋代商業史研究」三一八頁—三三六頁、を参照。繁華な表通りと裏通りとは、僦額にも大きな差が開いた。『會要』食貨四・方田雜錄・政和二年十月二十七日。ここでは具體的な算出方法を省略する。日野氏に人口五百萬人説があるが（『唐代邸店の研究』三三三頁—三四一頁）、従わない。

㉓ 『長編』卷一一・開寶三年三月庚戌。

㉔ 例えば、『宋史』卷二五六・趙普傳、同書卷二五〇・石保吉傳、及び『夷堅志』支志丁卷一・楊戩毀寺の條等。

26 日野氏『續唐代邸店の研究』九のⅥ、寺田隆信氏『山西商人の研究』第五章、宮崎市定氏『中國近世における生業資本の貸借について』（『アジア史研究』第三卷所収）、周藤吉之氏『宋代官僚制と大土地所有』第三章。

27 代表的なものとして、全漢昇氏『宋代官吏的私營商業』（『中國經濟史研究』中冊所収）を挙げて置こう。

28 衣川強氏に專論がある。「宋代の俸給について—文臣官僚を中心として—」「官僚と俸給—宋代の俸給について續考—」（『東方學報』京都四一及び四二）。

29 『會要』瑞興二・火災、南宋嘉定三年十二月十二日の例では、被災家屋の半數が打ち毀しにあつてゐる。また、火災時は豪民が庶民の土地家屋を侵冒する絶好の機會になつてゐる。

『會要』瑞興二・大中祥符三年四月。

30 『會要』瑞興二・高宗紹興三年十一月二十二日。

31 街使・軍巡使・巡檢、東西八作司・街道司等については別の機會を俟たたい。

32 『事物紀原』卷一〇・華表、及び樂嘉藻氏『中國建築史』第三編・坊、を參照。

33 明萬曆年間に成つたといわれる謝肇淪『五雜俎』卷三には、餘程のことが無い限り、侵街がかなり許容されるようになった趨勢が示されている。

34 『長編』卷二九七・元豐二年四月辛酉の條、及び『宋史』卷三三四・李稷傳。宮崎氏前掲論文「漢代の里制と唐代の坊制」參照。宮崎氏は「或いはこの侵街錢は、意外に古く既に唐代において徴收されてゐたのではないかとの推察も可能である」と

されるが、筆者は、この時期に創始されたと理解する。

35 前註宮崎氏論文、及び『溫國文正司馬公集』卷四六・乞去新法之病民傷國者疏。

36 『長編』卷一四八・慶曆四年四月壬寅。

37 『東京夢華錄』卷二等。行については、古くは加藤繁氏『唐宋時代の商人組合「行」を論じて清代の會館に及ぶ』（『支那經濟史考證』上卷所収）、全漢昇氏『中國行會制度史』があり、また、小野寺郁夫氏『宋代における都市の商人組織「行」について』（金澤大學法文學部論集・史學篇一三）は加藤説への批判を含む。すなわち、小野寺氏は、行は種々の便宜上、官府によつて、上から設けられた意味合いが濃厚で、商人組織としての自治性が稀薄であるとされる。小野寺説に従いたい。しかし、いづれの論考も、南宋時代の行についてのみ詳しく、市區域に蜷集されていた行戸が、北宋時代、如何なる經過を経て各街路に散じていったかは明確にされていない。

38 市易法に關する最も早い論考として、式守富司氏「王安石の市易法」（『歷史學研究六一〇』）があり、大崎富士夫氏に專論がある。「市易三法について」（『廣島商大論叢・商經編四一』）「市易法の研究——とくに結保賒請について——」（同右八一）「市易抵當」（同右一〇一一）。

39 文彦博『文潞公文集』卷二〇・言市易。

40 我邦の都市街路も、商業隆盛を契機として北宋期の開封と同様な變貌を遂げていった。京都を代表例として言えば、條坊制下の「二面町」から出發し、「四面町」から自立した「片側町」へ、「片側町」からさらに街路を挟んで向かい合う「兩側町」

の成立を應仁大亂後の廢墟の中に見い出している。京都は、この「兩側町」の成立を基盤として、その後の町組織成へ、近世都市へと胎動を始めたのである。秋山國三氏「條坊制の「町」の變容過程——平安京から京都へ——」（『京都「町」の研究』所收）等参照。

④① アンリ・ピレンヌ（佐々木克己氏譯）『中世都市——社會經濟史的試論——』四章・五章・六章。矢守一彦氏『都市圖の歴史』世界篇第二部等。

④② 日野氏『續唐代邸店の研究』九・邸店と權力。周藤氏『宋代官僚制と大土地所有』八二頁。藤井宏氏「新安商人の研究」

（東洋學報三六―四）、とくに、六・國家及び官僚との關係。寺田隆信氏『山西商人の研究』第五章「山西商人」の系譜。傅衣凌氏『明清時代商人及商業資本』一・明清時代商人及商業資本發展概述。梅原郁氏「北宋時代の布帛と財政問題」第二章（史林四七一―二）。

④③ 矢守一彦氏『都市圖の歴史』世界篇・二九二頁。

④④ 話本文學の成立は、街路機能の多樣化を下地としていたと考える。龐德新氏『從話本及擬話本所見之宋代兩京市民生活』等を參照。曾我部靜雄氏『開封と杭州』、入矢義高氏「北宋の演藝」上下（東光八・日本中國學會報六）も參考になる。